

きょうだいたち、私たちの主キリスト・イエスにあって私が持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、私は日々死んでいます。エフェソで獣と闘ったことがただ人間的なことにすぎないのなら、私に何の益になるでしょう。死者が復活しないとしたら、「食べたり飲んだりしよう／どうせ明日は死ぬのだから」ということになります。思い違いをしてはいけません。（Iコリント15：31～33a）

パウロは、「キリストは死者の中から復活し、眠りに就いていた人々の初穂となられた」と告げる。アダムの墮罪によって、人間は死ぬ者となったが、キリストの復活によって、全ての人が生かされることになった。ここから、当時の終末信仰に基づく神の国が描かれている。復活には順番があり、まず、初穂のキリスト、次いで、キリストが来られる再臨の時に、キリストに属する者たち、それから、世の終わりが来る。世の終わりが来た時、キリストは全ての支配、権威、勢力を無化し、父なる神に国を引き渡される。キリストは全ての敵を足の下に置くまでは、国を支配することになっており、最後の敵として「死」を無力にされた。キリストの復活によって、死は完全に滅ぼされた。「神は、万物を、その（キリストの）足元に従わせた」からである。「万物が従わせられた」と言われる時、万物をキリストに従わせた方、即ち、神が含まれていないことは明らかである。万物が御子キリストに従う時、御子自身は、ご自分に従わせてくださった方、神に従われる。神が全てにおいて全能であられるからである。キリストが全てを支配するが、終末後の神の国においては、キリストの支配は神に全てが譲渡される。

パウロは次に、キリストが復活しなかったなら、二つの不都合があると書いている。一つは「死者のための洗礼」が無意味になることである。コリント教会では、「死者洗礼」が行われていた。死者洗礼ではなく、死者に代わる「代理洗礼」ではないかという説もある。いずれにしても、死者に関わる洗礼が行われていたが、パウロは、死者の復活がないとすれば、この洗礼に意味がなくなると言っている。今日でも、死者洗礼をすることがあるが、洗礼は復活に与り、神の国に入る権利証ではない。洗礼は、キリストの恵みを知らされ、神への感謝の応答として受ける新生の儀式である。パウロは、異言や死者洗礼などの当時の教会の習慣も批判せず、受け入れ、意味を認めていたようである。

二つ目は、キリストの復活がなかったならば、生活が無意味になってしまうことである。パウロたちの宣教は常に危険を伴うもので、それを誇りにしているが、実際は日々死んでいるようなものである。「エフェソで獣と闘ったことがただ人間的なことにすぎないのなら、私に何の益になるでしょう。」パウロはローマの市民権を持っていたので、獣との闘いの刑罰を受けることはないだろう。エフェソでの宣教で、大きな苦難があったということではないか。これを受け、「死者が復活しないとしたら、『食べたり飲んだりしよう／どうせ明日は死ぬのだから』ということになります」と、復活がないなら、飲食を楽しみ、享樂を生きよう、無駄な苦勞はしないという思いになる。パウロは思い違いをいけないと言い、復活を否定する人々との付き合いは、善い習慣を損なうと警告する。「正気になって、正しい生活を送りなさい。罪を犯してなりません。」復活信仰は、善に向かって生き始めることである。コリント教会では、復活信仰を否定し、淫らな生き方をする人がおり、その人々を「恥じ入らせるためです」と、復活信仰の意味を語っている。